『論語義疏』と梁代仏教

石橋成康

中国仏教がインド仏教をそのまま受け入れて発展したものでないことは言うまでもない。仏教思想史から言えば、六朝時代に於けるいわゆる「格義仏教」を通して徐々に中国仏教を形成していったのである。この受容の過程において問題となったことは精神が不滅であるかどうかという、いわゆる「神不滅論」や、『論語』の有名な言葉「未知生、焉知死。」的中国的世界観と輪廻転生を認めるインド的世界観との相克、更には社会的には僧と在俗の王との関わりを問うた「不敬王者論」などがある。これらの問題以外に中国思想全体を巻き込んで論議されたものとしては、人の生まれ持った性格が善であるか悪であるかといった、仏教的には仏性に関する論議、中国思想的に言えば「性善・性悪」に関する論議が上げられよう。この問題は中国仏教思想の発展からみて、「悉有仏性」という中国仏教の底流を形作ったことは言を待たない。特に当時の文化を担った六朝時代の貴族・士大夫の間においては、仏教だけの問題ではなく中国思想全体の問題として議論され、また積極的ではないにしろ、後の朱子学や陽明学にも影響を与えるのである。仏教的に言えば人は仏性を有するかどうかの問題、中国思想的に言えば「性善・性悪」の問題に関する仏教側からのアプローチについてはこれまで機会を得て論究[1]してきたが、ここでは儒学・経学の中にみられる仏教の影響を、最も六朝的な経書に関する著作である皇侃の『論語義疏』から探ってみたい。

まず『論語義疏』の著者である皇侃と仏教の関わりであるが、その関係を直接示唆するものは、『梁書』[2]や『南史』に残される彼の伝記にはなにも記載されていない。ただ彼の師である賀瑒が梁の武帝の「勅答臣下神滅論」[3]に答えたものが弘明集に記載されている。当時、五経博士という経学を扱う地位にいた賀瑒でさえこのような仏教の論壇・サロンに加わらねばならなかった梁の仏教王国において、その師匠とともに員外散騎侍郎として朝廷に列していた皇侃自身も仏教と無縁であるはずはなかった。

杉浦豊治氏は「論語皇疏とその論理」[4]で

このように南北朝時代にはさながら流行なるかのごとく、義疏あるいは講疏という名称を経書の解にかむせたということ、……（中略）……一つには仏書の解釈の影響する所となったということ、これを度外において考慮することは、むつかしい。

と述べるように、『論語義疏』という書名自体、仏教・儒学を含むいわゆる玄学の影響を現わしていると言えよう。その書名に限らず『論語義疏』においては、当時の仏教者が好んで使った仏教的言い回し、いわば仏教的思想語彙とも言えるものが散見される。吉川忠夫氏[5]が指摘されるように、例えば『論語』の「未知生、焉知生。」は季路の「問事鬼神。」という質問に答えたものであるが、この部分に皇侃は注釈して次のように述べている。

外教無三世之義、見乎此句也。周孔之教唯説現世。不明過去未来。政言鬼神在幽冥之中、其法云何也。此是問過去也。[6]

この注釈においては皇侃は、「外教」という本来仏教の経典以外の書物をさす仏教用語を使用している。「外教」という言葉にはもちろん人間内部の問題を扱う「内教」に対する世俗のあり方、人倫のあり方を問う「外教」といった意味もあろうが、やはり内教は外教より優れているという価値判断も含まれるであろう。この様な価値判断が『論語』の注釈に現われていることは注目すべき点であろう。更に続いて「過去」「現在」「未来」といった六朝士大夫が最も影響を受けた三世応報的世界観が如実に現われている。続いて「未知生、焉知生。」に対する注釈では

亦不答之也。言汝尚未知即見生之事難明。焉能予問知死後也。

と述べる。ここで皇侃は孔子が三世応報の義を知っていたのだが、季路が現世の事さえ満足に知らなかったから答えなかったとするのである。このような経学に対する考え方は慧遠の『三報論』などにも共通するものである。このような仏教用語が儒教の基本的な典籍である『論語』に現われていることは注目すべき点であろう。また彼の師である賀瑒は『勅答臣下神滅論』に対する回答の中で

孝[7]之旨愈明。因果之宗彌暢。崛山粹典即此重彰。洙水清教於茲再朗。譬諸日月無得踰焉。

と述べるように、あくまで崛山の粹典たる仏典と洙水の清教たる儒教の経典とは日と月の関係にも例えることのできる関係にあるとして、その両者の関係はまったく同等であると見なしている。それに対して先の皇侃の注釈では仏教のほうがより内的側面において優れていると見ているように思われる。同じ梁代に生きた経学者であり、師弟関係にあった賀瑒が明らかに仏教を「因果之宗」であると考えており、皇侃もまた当時の一般的士大夫の仏教観と同じく仏教を因果にもとづく「三世応報」の教えを仏教の重要な教義と見ているのは

興味深い点である。

以上梁代の仏教界、玄学の中で問題となった「三世応報」的世界観が『論語義疏』に与えた影響を見てきたのであるが、次に経学にとってはより重要な問題である人間の「性命観」についての『論語義疏』の立場を見てみたい。人間の根元的な性格が善であるか悪であるかという問題は、儒家にとっては人間が聖人の立場に至れるかを含む問題であり、礼の教え、政治倫理として為政者にアピールするかではなく自我を救い得る教えとして個人にアピールするかどうかの問題であった。その意味では儒教がより普遍的な教えとして成立する重要な要素であったと言えよう。そのため孟子と荀子の学説の違いを見るまでもなく漢代から宋明理学に至るまで問われ続けた問題であった。梁代においては仏教界においても漸悟と頓悟の論争の中で同様の議論がみられる。このような玄学の発展に即した時代的思潮は『論語義疏』にも影響を与えている。『論語』衛霊公篇の

子曰、有教無類。

に対する皇侃の疏には

世咸知斯言之崇教、未信斯理之諒深。生生之類、同禀一極。雖下愚之不移、然化所遷者其万倍也。生而聞道、長而見教、処之以仁道、養之以徳、與道終始。為乃非道者、余所不能論之也。

と述べている。ここで皇侃は「この世に生を受けたものはともに究極的立場を天から受けている。」とする。すなわち皇侃にとって人間は教化によって聖人に至る芽を持っているのである。『論語』陽貨篇に見える「賢者と愚者は賢愚のまま変わることがない。(上智と下愚は移らず。)」を引用した後、皇侃は愚者は愚者として変わることがなくても、それでも教育によって道を体得すると述べるのである。では皇侃がここで述べる「生生之類、同禀一極。」の「一極」とはどのようなものであろうか。皇侃が使用した一極の意味に近い例としては、管見の及ぶ限り六朝宋代の謝霊運の『弁宗論』に表れる一極がある。

釈氏之論、聖道雖遠、積学能至、累盡鑑生、方応漸悟。孔子之論、聖道既妙、雖顔殆庶、体無鑑周、理帰一極。

ここで謝霊運は仏教と儒教の聖人観を比較している。すなわち仏教にとって聖なる道は、学を積み、至ることの出来るものであるとし、儒教における聖なる道は弟子の顔回と雖ども到達できないものであるが、無を体得すれば一極に帰一すると述べるのである。明らかにここで謝霊運は儒教を「有」の教えであり、儒教に欠けた「無」を体得すれば一極の究極的境地に悟入出来ると考えており、その底には人間の根元的性格は悟り得るものであるとする思想があった。ここに玄学の影響を見ることもでき、また謝霊運が師事した竺道生の影響も見ることが出来よう。このような彼の述べる「一極」に

は皇侃の「生生之類、同稟一極。」の一極と同様の傾向がみられる。少し時代は下るが、同様に竺道生から教えを受けた南斉の劉虬は彼の著になる『無量義経』序で

夫三界群生随業而転。一極正覚、任機而通。流転起滅者、必在苦而希楽。此叩聖之感也。順通示現者、亦施悲而用慈、即救世之応也。(9)

と述べている。ここで劉虬は「究極的悟りというものはそれぞれの機根に対応して行なわれるものであり、流転しているものは苦界の中で楽を願うものである。これが聖人を訊ねる端緒となる。既に道に従って現われた者は慈悲を行なう。これが世を救う働きとなる。」と述べている。ここで劉虬は現世の教えである儒教と慈悲の教えである仏教とを比較しているのであろう。また劉虬と同時代である南斉竟陵王蕭子良の『浄住子浄行法門』では一極ではないが

稟天性所極、資敬道所崇、羽毛共以勢、輪軌相為通。(10)

と述べている。すなわちここでも蕭子良は天から受けた性格の究極的なものと儒教の孝は矛盾しない一極であるとするのである。

以上のように南斉から梁代にかけて一極という言葉は六朝士大夫が議論する際、儒教と仏教が現世の教えであるか因果応報の教えであるかの違いこそあれ、究極的には同一であることを証明する時によく使用されていることがわかる。このような言葉が仏教者の口からではなく、経書の注疏である皇侃の『論語義疏』に現われていることは注目すべき点であろう。以上のようにこれまでの六朝仏教は格義仏教として中国思想をいかに援用しつつ発展したかについてはよく論究されてきたが、反対に六朝時代において仏教が経学に与えた部分もあることは忘れてはならないであろう。

1　拙著「沈約の仏教観」（印度学仏教学研究三二巻二号）「支遁における至人と仏教」（法然学会論叢六号）等参照。
2　『梁書』巻四八
3　『弘明集』（大正五二・六五頁中）
4　『金城国文』十六巻　四五頁
5　『大乗仏典・四　弘明集・広弘明集』（中央公論社刊）四一二頁
6　『論語義疏』先進篇
7　『弘明集』（大正五二・六五頁中）
8　『広弘明集』（大正五二・二二四頁下～二二五頁上）
9　『無量義経』（大正九・三八三頁中）
10　『広弘明集』（大正五二・三一四頁下）

〈キーワード〉　格義仏教

（仏教大学非常勤講師）

掲載されなかった諸氏の発表題目（五）

『一乗要決』における一、二の考察　林田正見（大正大学綜合仏教研究所）　新義真言宗における論議について　榊義孝（大正大学綜合仏教研究所）　胎蔵略次第について　佐藤正伸（高野山大学大学院修了）